

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 13 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500712

研究課題名(和文) 幼児の「身体的な感性」を育むための実証的研究

研究課題名(英文) Empirical Research on the Development of Physical Sensitivity ,Kansei, in Young Children

研究代表者

鈴木 裕子 (Suzuki, Yuko)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40300214

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幼児期における「身体的な感性」という概念の有効性を検討した。そのために特に、模倣された子どもに着目し、そこから広がる子ども間の身体による相互行為を焦点とした。幼稚園における筆者の観察によって収集された事例、保育者を対象とした調査によって得られた事例を、質的、量的に分析考察した。その結果として、(1)模倣された子どもにもたらされる身体による模倣の機能、(2)身体による模倣が相互行為に果たす役割、(3)3歳、4歳、5歳における身体的な相互行為の発達的特徴、が明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：This study investigates the efficacy of the concept of physical sensitivity, or kansei in young children; it particularly focuses on the physical interactions that result from a child being imitated by others. Qualitative and quantitative analyses were conducted on cases collected through the authors' observations in kindergarten, and from surveys of nursery and kindergarten teachers. The results demonstrated (1) that the performance of physical imitation originates from a child being imitated by others, (2) the role played by physical imitation in governing physical interactions, and (3) the particular developmental characteristics observed in the physical interactions of 3-, 4-, and 5-year-olds.

研究分野：保育内容学、幼児期の身体表現と身体活動

科研費の分科・細目：健康、スポーツ科学・身体教育学(感性の教育)

キーワード：感性 身体的な感性 相互行為の発達的特徴 身体的コミュニケーション 相互模倣 模倣された子ども 幼児期 身体性

1 . 研究開始当初の背景

わが国の教育改革の背景には、学力低下だけでなく、コミュニケーション能力の不足に端を発した「社会で生きる力」の問題が存在する。この背景のもと、平成 20-22 年度科学研究費補助を受け、「身体的なコミュニケーションとしての模倣の有効性」の研究を行った。そこでは、幼児期の他者との相互行為としての「身体による模倣」に着目し、身体的コミュニケーション力としての模倣の機能と役割を検討した。模倣することによって、他者との相互行為が活性化する機能が多様に捉えられ、身体双方向性のもとで他者とのほどよい一致を生み出す役割が実証された。

一方、この研究過程で新たに生じた問いが、幼児にとって身体による模倣発現や、身体の相互行為に深く関わると考えられる力、「感性」とは何か。限定するならば、子どもが「他者を含めた様々な環境に身体でかかわるための感性」である。感性は、子どもの姿を様々な捉えられる包括的で響きのよい言葉として用いられてはいるが、ではどのような行為が、感性の豊かさに基づくものであるのか、このような率直な問いに答える材料を十分に蓄積してきたとは言えない。

そこで、幼児期において感性とはどのような行動様式として現れているかを明らかにし、どのような仕組みや働きを持っているのかを検討することを目的とし、そのツールとして「幼児期の感性尺度」の開発を試みた。それによって、感性とは、自己の内奥にのみ向かうのではなく、他者を含めた社会・環境に向かっており、自己の社会化の程度すなわち自己理解と他者理解の程度が、感性の形成や発揮を規定していると考えられた。その意味で、感性は他者とのコミュニケーションを促進させる基盤となる可能性が見出され、幼児期の感性を社会へのかかわり方という核によせて検討を重ねる意義が認められた。

また平成 22 年 5 月、文部科学省副大臣主催によるコミュニケーション教育推進会議により、多様な価値観を持つ人々と協働しながら社会に貢献することができる創造性豊かな人材の育成が明示され、子どもたちのコミュニケーション能力の育成が必要であることが指摘された。そこでは、コミュニケーション能力の一端としての対人スキルは、言葉を使用するだけでなく、表情や動作など身体を核にすべての感覚を駆使し、ほどよく他者を理解し心地よく過ごせる環境を探索する力であるとの認識が示されていた。

しかし学問的には、「身体的コミュニケーション」は、これまで非言語コミュニケーションという呼称で「身体」を他の諸事象と一括りに捉えられてきたため、その実際が明ら

かにされていないと考えられた。

以上のような背景に動機づけられ、次の課題として、身体的コミュニケーション（本研究では「身体的な相互行為」と称する）の実相に接近するために、「身体的な感性」という概念を手がかりとすることを構想した。

2 . 研究の目的

(1) 目的

本研究は、幼児期の「感性」を社会へのかかわり方という核によせて検討するために、「身体的な感性」という概念の有効性を明らかにすることをねらいとした。そのために、保育現場において、幼児の「身体的な感性」の育ちの様相を捉え、子どもたちの身体的なコミュニケーションを機能させ、豊かに育むための視点を実証的に検討する。具体的には、模倣された子どもに着目し、そこから広がる身体による相互行為の事例を分析した。

(2) 「身体による相互行為」とは

近年、子どもの身体による行為を解釈しようとする様々な研究の知見は、幼児が相互行為を通して他者を知り自己を知ることがコミュニケーションの基盤となるという共通の概念に支えられている。乳幼児にとってのコミュニケーションとは、「伝達」に重きを置いたものではなく、情動の共有から生まれ通じ合える喜びこそが本質であり（鯨岡：2006）、また身体の応答性と共振性が、社会を構成する原型を創り出す（佐藤：2000）とされる。このように、幼児の発達において認められる身体の知の先行性と優位性は自明であり、幼児期の相互行為は「身体による相互行為」と称するまでもなく、身体と身体の体験によって成立する現象である。本研究では、この視座を基軸とし、「身体による（起こる）」とは、身体から発する多様なシグナルを総称し、身体の動作、運動のみでなく、表情、発する言葉や口調、歌うことなどを含めて「周囲や他者にかかわる主体としての身体全体が為す現象」と位置づけた。

(3) 模倣された子どもに着目する意義

模倣された子どもに着目して身体による相互行為を論じる意義は以下の 2 点にあった。

1 点目は、受動性という立場で身体による相互行為を検討する意義が認められるからであった。保育や心理学領域を中心に、身体による模倣に関する研究を通覧すると、模倣が身体を媒体に社会的な相互作用を成立促進させる役割を持つことが様々な説かれている。しかし、そのほとんどが「模倣する側」に定位する。稀に「模倣された側」に言及していても、「模倣する子ども」から付随的に導かれ、直接的に「模倣された子ども」にもたらされる機能には踏み込んでいない。それ

は、これまでの乳幼児期の模倣行為への関心が、言葉獲得の機序を支える行為という意義を主流としたことに由来する。すべての行為は、その背後に目的に沿った特定の機能を有すると考えられ、模倣する主体側からの模倣機能の追究が中心となったためである。

しかし、近年、乳児が一方的に保護される存在でなく、身体の現象を通して他者とのかわりを生み出す主体とされるようになり、共鳴や共振といった他者との同型的な相互行為（やまだ：1996）としての模倣、横並びのまなざし（佐伯：2007）、一緒に見る（浜田：1999）現象が、乳幼児のコミュニケーションに重要な役割を果たすと指摘されるようになった。さらには、まねることは、他者になってみる行為であり他者との共感的かわりを促すとし、共感を軸に乳幼児の発達を考える視点（佐伯：2008）が示された。身体での模倣が社会的相互作用の成立や促進に寄与することが認められてきた。

また相手の主体性を受け止めるという意味では、受動性の契機を抜きにしては語れないことも指摘され、私たちが他者との関係で普段感じている受動性の契機が、人間の共同性のもつひとつの大事な契機をなしていると考えられた（浜田：1998）。したがって、模倣されたという自分側の受動は、相手の模倣をするという能動の裏返しの現象として、受動性の典型として認められたのである。

そのような視点の転換を受けて、乳児期に比べて同型的な行為が希薄になるとされる幼児期でも、身体の内面が他者との相互行為の基盤をなすことに関心が向けられた。「主体身体（榎沢：1997）」、「身体知（無藤：1997）」の理念の展開や、「幼児間の同型的行為（砂上：2000 他）」の解釈は、幼児間の双方向的な行為を身体性という核に寄せて捉える視点として本研究に示唆を与えた。

2 点目は、身体による相互行為を捉えるために可視的な現象を取りあげるという有効性が認められるからであった。幼児の場合、様々な場や時間で相互行為が出現し、いつ始まっていつ終わったのか、かわった子どもは誰かという枠組みが判断しにくいことが多い。本研究で着目する模倣された子どもは、模倣されたこと自体が相互行為という点において、すでに可視的な存在なのである。受け手すなわち模倣された側の内面や行為を焦点化することで、ひととひとの相互行為のメカニズムをより核心的に捉えられると考えたためである。

なお本研究における「模倣された(子ども)」とは、ある子ども(模倣した子ども)に、他の子ども(模倣された子ども)と同一の行動または類似した動きが見られた現象、模倣された行動と模倣する子どもの模倣行動

が比較的短時間の間隔で見られた現象、模倣された側と模倣した側の関係を繋ぐものが同一または類似した行為と認められ一連の文脈として捉えられた現象、と模倣に対しての操作的な基準を定義し、その現象に該当する子どもを対象とした。したがって本研究で取り上げる模倣は、共鳴や共振という無意識的な身体相互のやりとりというよりも、複数の幼児間に起こるまとまりのある行為としての模倣である。

3. 研究の方法

(1) 研究 : 模倣された子どもにもたらされる身体による模倣のもつ機能の検討

観察

<対象園> 兵庫県 H 幼稚園

<期間と対象>

2007 年 5 月～10 月：3 歳児クラス (20 名)

2008 年 4 月～11 月：4 歳児クラス (30 名)

2 週間に 1 日計 12 日

<事例の収集方法>

登園後 1 時間 30 分、異年齢交流の場として主体的に環境にかかわって自由に遊ぶ場面を対象とし、参与観察者としてかわった。日常生活で発現する模倣行為を観察し筆記記録し、保育終了後に記述し事例として収集した。収集された 39 事例中、模倣された子どもを強制的に捉えた 14 事例を対象とした。

調査

<期間・対象・手続き>

2006 年 9 月～12 月、愛知県、埼玉県、東京都の幼稚園・保育所における保育歴 2 年以上の保育者を対象に、「模倣が良い影響を及ぼしていた、何かが豊かになったと感じられた場面のエピソード」に関する質問紙調査を依頼した。その結果、73 園 280 名から 524 事例が収集された。模倣された子どもを焦点とした事例が 32 例 (全体の 5.9%) 抽出された。

(2) 研究 : 研究の結果を基にした 3 歳、4 歳、5 歳の身体的な相互行為の特徴の検討 (観察)

<対象園> 愛知県 T 幼稚園

<期間・対象・収集された事例>

・ 2011 年 6 月～7 月：3 歳児 N 組 (30 名) : 計 8 日約 25 時間、32 事例が収集され、文字化した事例は、32 事例 (A4 用紙 17 枚)

・ 2012 年 4 月～7 月：4 歳児 S 組 (30 名) : 計 11 日約 30 時間、20 事例 (A4 用紙約 14 枚)

・ 2013 年 4 月～7 月：5 歳児 N 組 (30 名) , 計 12 日約 28 時間、11 事例 (A4 用紙約 7 枚)

<方法>

朝 9 時前後の登園後 90 分程度の自由遊びから学級活動、給食前後までの約 3 時間、もしくは給食以降の自由遊びから降園前の学級活動の約 2 時間半を参与観察者という立場で

観察した。模倣された子どもを中心に、その前後の相互行為の経過を詳細に記述するために、筆記記録と、園に了承を得たうえでビデオ撮影を行った。撮影された映像から、子どもの行動や位置、発話などを逐語的に文字化し事例とした。その後、相互行為内で生じている連鎖のあり方を論じるために、事例を、【研究】の模倣された子どもにもたらされる身体による模倣の機能としての構成概念を用いて分類した。各事例における機能の読み取りと判定は、観察時と事例記述時、全事例抽出後に筆者が行った。事例記述後に担任教諭らと事例内容の確認と合わせて、機能の判定を合議する場合もあった。

4. 研究成果

(1) 模倣された子どもにもたらされる身体による模倣の機能

模倣された子どもと模倣する子どもとの関係とその変容が類似するものを集約し分類した。分類された事例の特徴を「機能」として命名し、再度、各事例がどの機能に該当するかを検討した結果、「模倣された子どもにもたらされる身体による模倣の機能」が以下5つ示された。5つの機能に照らした事例の再分類に際しては、記述された内容では模倣行為前後の文脈が明確でないために、複数の機能のいずれにも解釈可能な事例が見られた。機能の分類命名では、この点において限界が認められる。なお命名は、短い単語や専門的用語で示すことが一般的だが、ここでは保育者の捉えやすさと想起しやすさに配慮した表現を用いた。

「模倣された子どもにもたらされる身体による模倣の機能」と事例の解釈から導かれた機能の定義

(模倣された子どもは模倣されたことによって)

・他者とかかわることの端緒が得られる

模倣されたことによって、他者への親近感が生まれ、他者とかかわることを心地よいと感じる。それによって、模倣された子どもは安心して他者とかかわるようになる。

・他者の行為に気づき他者のイメージを認めて新たな行為が生まれる

自分を模倣した他者の行為によって他者の存在に気づき、緊張が緩和される。それによって、他者の持つイメージが認められ他者との一体感を持ち、新たな行為が発現する。

・自己の行為のイメージに気づき行為が自覚的になる。

模倣されたことによって自己の行為の意味やイメージに気づき、他者と一緒に共にあることの喜びを膨らませる。それによって、他者との自然なかかわりが誘発される。

・自己の行為のイメージに気づき他者とのかかわりが広がる

模倣された他者の身体の動きや行為のなかに、自己の行為のイメージをみつけ、自己の行為が自覚化される。それによって自己表現が喚起される。

・自己が肯定され他者に対しての直接的な行為が生まれる

模倣されたことによって他者とかかわる自分を楽しみ、喜びに似た快感情を湧かせる。それが他者受容や自己肯定感がもたらし、他者を励ます、世話する、ほめる、教える、競争するなどの行為が発現する。

(2) 身体による模倣の機能が相互行為に果たす役割

【研究】では、模倣される子どもにもたらされる身体による模倣の機能の分類に至る考察を試みた。事例のなかには複数の機能が重なって読み取れる場合もあった。そこで【研究】では、【研究】で得られた身体による模倣の機能を踏まえて、機能間の関連に着目し、模倣出現以前の文脈とその後の展開の分析から、相互行為に果たす役割を論証した。特に3歳児を対象とし、自由な遊びのなかでの展開を対象とした。模倣される子どもにもたらされる身体による模倣機能によって生じる相互行為の場面での役割を、3つの観点でまとめた。

複数の子ども間で異なる機能が発現し混在して相互行為が進む

模倣されたことによってもたらされる身体による模倣機能が、多くの子どもに同時に様々に現れ、それらが入れ替わったり混在したりして遊びが創られる様子が見られた。

「模倣する-模倣される」「見る-見られる」「見せる-見せられる」の関係の転換が瞬時に起こる。このような様相は「相互模倣の順番取り」とも称され、2歳半頃から仲間同士の相互コミュニケーションの手段として利用される(佐伯:2007)と指摘されていることから裏付けられた。模倣されたことによってもたらされる5つの身体による模倣機能は、単独で役割を果たすだけでなく、いくつかの機能が関連し合って相互行為を活発にすることが実証された。また、相互の模倣によって遊びが創られていく事例からは、模倣されることは、子どもにとって自分というものが他者によって成り立つという意識を促す役割を持つと考えられた。

また、模倣された子どもが模倣を仕返し、模倣後には模倣前の遊びのレベルが上昇していく様子も捉えられた。模倣する者と模倣される者の役割は転換しやすく、このような関係の転換が、複数の模倣機能を繋ぎ、子

もたちの相互行為を促進させる役割を持つことが認められた。

共に流れるような相互行為

「模倣する-模倣される」という2人の関係には、その役割が反転することなく一方向的な関係が続きながらも、双方がその関係自体を意識して続ける、もしくは楽しんでいると捉えられる様子が見られた。「模倣する-される」の関係を固定させながら、模倣される子どもは随時異なる役割を担う。それによって、流れるような相互行為が続けられる。

途切れる

何らかの阻害要因によって、相互行為が消失し、遊びが「途切れる」様子も見られ、身体による模倣の機能が、相互行為の発展の逆作用を発現させる場合が示された。

1つ目は、模倣されて「自己の行為のイメージに気づき他者とのかかわりが広がり」かかるのだが、模倣する相手が自分から離れたり、見えなくなったりし、機能が発現しかけながらも消失し相互行為が途切れる場合である。

2つ目は、模倣された子どもが模倣されることを嫌がることによって途切れる場合である。そこでは「他者とかかわることの端緒」は得ても、自己への強い気づきが、不快で不愉快な感情を湧かせ、「他者の行為に気づき他者のイメージを認める」ことができず、他者を妨害するという「新たな行為」を生んでいる。また、自分のちょっとした失敗をそうとは思わない他児にまねされて感情を高ぶらせ相手を拒否したことが要因となっている事例も見られた。この場合は、自己への気づきがかえって他者とのかかわりを拒否するという自覚的な行為になったと捉えられ、「自己の行為のイメージに気づき行為が自覚的になる」機能の異なる発現の様相と解釈された。

相互行為が途切れる場面での子どもの内面は一様ではないが、身体による模倣の機能を適応させた解釈が、「途切れた」要因の理解への一助となった。

(3)3歳,4歳,5歳の身体的な相互行為の特徴

模倣された子どもから広がる身体による相互行為の年齢別発現数

発現した事例数の比較から、模倣されたことから広がる身体による相互行為は、4歳になっても消失はしないが3歳よりも減少し、5歳ではさらに減少することが示された。

3歳児の特徴

3歳児における模倣された子どもから広がる身体による相互行為は、模倣されたことによって、他者とかかわることの端緒を得て、同じ発話や同じ行為をしながら同調や同期を繰り返すこと自体を楽しむことが多い。そ

のうえで、相互のやりとりを通して、何かの意味付けられイメージが共有されたり、双方共に自己表現が喚起されたりする特徴が見られた。しかし、それらの場合でも、3歳児では、一人もしくは少人数の相手を対象としたやりとりが中心となる。また、特定の仲間に固執しないために、相互行為の終末は自然消滅の傾向が強い。一方で、模倣されたことによって起こる自分への気づきが、結果的に相手を拒否し、身体による相互行為を途切れさせる要因になることもある。それは、集団の内と外に対する境界意識が曖昧な3歳児の特徴に由来すると捉えられた。

4歳児の特徴

4歳児における模倣された子どもから広がる身体による相互行為は、模倣された側が、自分の行為のイメージを模倣される以前から抱き、模倣されることを意識して他者を誘う方略をとって開始される特徴が見られた。その後の行為も、相手の行為を認めながらも自分の行為を貫いて他者にかかわる。また、模倣されたことによって自己の行為のイメージに気づき、知識や経験と結びつけて意味付け、ストーリーをつくること身体による相互行為を広げる要因になる。意味付けの内容が複雑に高度化することで、身体による相互行為の質や時間を変化させていた。一方、他者のイメージを認められないときには、言葉による明示的な拒否よりも、相手を牽制したり、無視したり、自分に主導権があるような強い態度で振る舞ったりなど婉曲的な拒否的態度を示すようになる。それによって役割が転換したり、仲間集団のサイズが随時変化したりする。一方、3歳で見られた特徴のすべてが4歳で消失し、他のものに置き換わるわけではないことも示唆された。模倣されたという受動性が生かされ、自己の行為のイメージに気づき、それを意味付ける力が、3歳から4歳への発達に伴って高度化することで身体による相互行為の質が変化することが示された。

5歳児の特徴

5歳児における模倣された子どもから広がる身体による相互行為は、3歳児のように同期や同調そのものを楽しむような比較的無自覚なやりとりが消失し、また4歳児のように、他者を誘うために意識して、身体による行為によって他者が自分を模倣することを仕掛けるという方略を、他者とかかわることの端緒とする様子も見られなかった。かわって、全体をイメージしながら他者の行為の部分を切り取って自分の行為に取り入れ、同時に自己の意図をより強く自覚し見通しをもって相互行為を進行させる。また、自分を客観的に捉えて場の状況を語って仕掛けるという行為が、模倣行為にもたらされる機能に

入れ替わるようにして5歳児の身体による相互行為に現れることが認められた。ナラティブ的思考と論理的思考の共存が基盤になっていると考えられた。

3歳, 4歳, 5歳の発達のな変化

3歳, 4歳, 5歳の最も特徴的な発達のな変化は, 以下の2点であった。

1点目は, 模倣された子どもすなわち受け手側の意識の違いである。4歳になると, 意識的に自分を模倣することを他者に促し, 他者を誘うために模倣を仕掛ける方略を相互行為の起点とする様子が顕著に見られた。このことは, 4歳という年齢が, 3歳以前と5~6歳の過渡期として, 他者のことを考慮に入れつつ自己の呈示が際立つ時期という岩田(1998)の知見にも裏付けられ, 自他関係の移行的な状態の現れと解釈された。

2点目に, 3歳児では, やりたいこととやりたくないことという感情を, 欲求として両方向に端的に表すという要因が, 身体による相互行為に影響を与える。それに対して4歳児では, 自分のやりたいという欲求は, 自身である程度自覚し意欲として行為に現す一方で, やりたくないという欲求との調整が不十分なため, 身体による相互行為に不安定さを与える要因になると考察された。5歳児では, 自己欲求を調整し動機とし, 自然な自己表現の連鎖を生み出す力が備わることが認められた。一方, 自己の調整は, 4歳児に比して自然さがあるものの, 他者との意識のズレを調整したり受容したりする力は, 未だ充分ではない。幼児期後期に, イメージ表現の中核を担う動作に言葉が加わっても, 言葉が動作に置き換わるわけではなく, 減少したとは言え, 模倣されたという受動性が, 身体による相互行為に果たす役割は決して小さくはないことが確認された。

(4)まとめと今後の課題

本研究では, 「身体的な感性」を可視化するために, 模倣されたことから始まる身体的な相互行為に着目した。そこでの「身体性」や「身体感覚」を核とした実証的な検討により, 「身体的な感性」を「他者や環境との身体を媒体とした双方向的な力」と捉える有効性が認められた。

そこでは「模倣が身体による相互行為に良い影響を及ぼす」という考えに立脚して考察が進められた。しかし, 模倣によって身体による相互行為が繋がらなかつたり途切れたりする場合も見られた。模倣の意義における中立的な視点や, 模倣の好ましくない側面という観点での考察によって, 逆説的な示唆が得られる可能性もある。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

鈴木裕子. 2013. 模倣されたことから広がる子ども間の身体による相互行為: 3歳児と4歳児の発達の特徴を焦点として. 子ども社会研究. 19. 105-118. 査読有

<http://www.js-cs.jp/journal/>

鈴木裕子・横井志保. 2013. 「表現」における保育士の専門性を考える: 保育士への意識調査をもとにして. 保育士養成研究. 30. 1-10. 査読有

鈴木裕子. 2013. 「幼児の感性尺度」の効果的な活用に向けた検証: 保育者の捉える「幼児の感性」の分析を通して. 幼児教育研究. 17. 3-10. 査読無

<http://hdl.handle.net/10424/5283>

鈴木裕子. 2013. 「保育者の資質能力としての身体表現の理解」『保育フォーラム: テーマ: 保育における多様な表現』保育学研究. 51-3. 461-464. 依頼論文

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009686832>

鈴木裕子. 2012. 模倣された子どもにもたらされる身体による模倣の機能と役割. 保育学研究. 50-2. 141-153. 査読有

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009562775>

鈴木裕子. 2011. 「身体的な感性」の概念化に関する論考. 名古屋柳城短期大学研究紀要. 33. 23-36. 査読無

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008915824>

[学会発表](計5件)

鈴木裕子. 2013. 5. 11. 幼児間の相互行為の発達のな変化: 模倣された子どもに着目して. 日本保育学会第66回大会. 研究発表論文集 612. 中村学園大学

鈴木裕子. 2012. 12. 8. 保育者の捉える幼児の感性. 乳幼児教育学会. 発表論文集 210-211. 武庫川女子大学

鈴木裕子. 2012. 5. 4. 幼児にとっての「模倣される」意味. 日本保育学会第65回大会. 研究発表論文集 612. 東京家政大学

鈴木裕子. 2011. 5. 22. 幼児の「身体による表現」をどう捉えるか: 「身体による模倣の機能と役割」. シンポジスト. 日本保育学会第64回大会シンポジウム. 玉川大学

鈴木裕子. 2011. 5. 22. 幼児の感性としての「能動的応答」. 日本保育学会第64回大会. 研究発表論文集 612. 玉川大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 裕子 (YUKO SUZUKI)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号: 40300214